



九十九たち二人が病室に入ると、少女の髪をとかしていた看護師が気配に気付いて振り返った。

「あら先生、診察には少し早いではありませんか？ 九十九先生まで御一緒なんて」

衣笠恵美子が若い医師を少しだけ睨むようにしながら言った。

「キヌちゃん…いやエミ…ああ衣笠君、今日から清水さんの主治医は彼が務める事になった。しっかりサポートしてくれたまえ」

わざとらしく咳払いをして、彼は傍らに立つ九十九を紹介した。

「今後はメンタルケアが主体になるのですか？ 彼女にはまだフィジカルケアが必要だと思うのですが」

「エ〜ミちゃん！ そんなに堅苦しく考えちゃだ〜めだって、リハビリはこれまで通りやってくからさあ〜、よろしく頼むよ〜」

「コラ九十九！ 少しは場所ってものをわきまえろ、患者の前だぞ！」

「ハイハイ、気をつけますよ〜」

漂々とした足取りで病室の窓際まで進むと、どこかおどけたステップでクルリと振り向いた九十九が、背を向けていた加夏子の顔を正面から覗き込んだ。

「君がウワサのお姫サマかい？」

うつ向き、髪をとかせるに任せていた加夏子がゆっくりと顔をあげた。

「清水 加夏子です」

しっかりとした口調。

険のある、だがどこか戸惑いを含んだ端正な顔。

瞬かない瞳。

九十九が加夏子を凝視する。

一秒の何分の一に満たない時間、二人の周りで空気が凍りついた。

「…ウン、なかなかの美人ちゃんだな。今日から僕が君の担当だ。ヨロシクね♪」

加夏子の肩を軽く叩き、九十九は車椅子の脇をすり抜けた。

そのまま病室の出口へ向かう。

今しがた見せた緊張は微塵もなかった。

「かるいヒト。でも嘘。心にメスを持ってる。ワタシ嘘つきは嫌い」

加夏子が呟く。

九十九が足を停めた。

「長官、と呼んでくれ。長い付き合いの者は皆、僕をそう呼んでいる」

暫くの間、黙って背を向けていた彼が加夏子に告げた。

若い医師が顔をしかめた。

「ちょうかん？」

加夏子が首を傾げて聞き返す。

「君とは長い付き合いになりそうだからね、じゃ」

そのまま振り向きもせず、九十九は病室を後にした。

真剣勝負になるな

白衣のポケットに手を突っ込み歩く九十九は、もう笑っていなかった。

◇

今日のリハビリも終わった
いつもと変わらず、滞り無く

清水加夏子のリハビリメニューは今まで通りに続けていた
主治医が変わろうが、物理療法を続ける限り俺達トレーナーの役割は何も変わらん

変わったのはあの娘だ
口をきけるようになったのは結構なんだが、まるで何かが抜け落ちちまったみたいに、虚ろでいる時間が増えた気がする
それでも聞かれた事にはちゃんと返事するし、メニューも以前より積極的にこなしているように見える
見掛け上は、な

だが手応えを感じない
口もきけず無表情だった頃の方が、拒否にせよ諦めにせよ内面の葛藤って奴をどこかに感じとれた
それが今じゃ、まるでじゃじゃ馬がイイこちゃんを装って周囲を欺いているかのような印象ばかり強い

いや、それも違う
悪意や作為は感じられない
強いて言うなら…

目が、冷めているのだ
まるで何もかもお見通しだと言わんばかりの、冷たくて乾いた目
そして時折見せる、年不相応な老いた表情
あの娘はあんなじゃなかった筈だ、一体、何がどうなっちまったんだ
それとも、変わっちまったのは俺の方なのか

トレーニング室の器具を片付けながら、銀さんは物想いに耽っていた。
仲間達は珍しく寡黙な彼を気遣ったのか、パラパラと声を掛け、そっとその場を後にしていた。

あの晩、俺は紗季子を抱き締めた
見ちゃいられなかった
あの気丈な紗季子があんなに泣いて、今にもポッキリ折れちまいそうで、そうせずにはいられなかった
抑え、隠し続けてきた色々な想いが、あの晩を境に俺の中へ戻ってきちまったような気がする

だかアイツは、今じゃ他人の女房だ
そして俺にはアイツを想う資格は無い

あの娘…
加夏子の視線に、俺は自分の中身を見抜かれたような気分になっちまったんじゃないか
それで変だなんて感じたんじゃないか

マットの上にあぐらをかいて、銀さんはとめどなく考え続けていた。
ふと人の気配がした。

「聞こえましたよ、銀さんの声。酷く悲しそうだった」

「もういいのか」

「ええ。どうにか、ね」

少しやつれ、寂し気に微笑む殉の姿が、いつの間にか戸口の脇にあった。

◇

数日後。病院の裏手、雑木林の前。

ひとしきり強く吹いた冷たい風が、まだ幾らかは残っていた木々の葉を散らす。
斜めに降りしきる赤茶色の落葉が、車椅子の少女を覆い包んでいた。

薄い毛布のかかった膝には詩集が一冊。
ページは閉じられたままだ。
彼女の目もまた開く気配は無い。

舞い散る落葉以外、静止した世界に足を踏み入れてくる者がいた。

「ヤァ」

穏やかな声に、微かな緊張が隠れていた。

「なんだか、ひさしぶりに会ったみたいだな。へんだね、ずっとおなじ病院に居るのにさ」

劇場の幕があくように、少女の瞳がゆっくりと開いた。
詩集の上に重ねられていた両の手がスゥーと車椅子のホイールにかかると、落葉を踏む音も立てずユルリと彼のほうへ向きを変えた。

「ひさしぶりよ、殉君。あなたと会うのは」

少女…清水加夏子が低く答えた。

「……………」

言葉はそこで途切れてしまう。
向かい合ったまま、気まずさとも緊張ともつかぬ時間が流れていった。
風がまたひとつ、二人の間を抜けてゆく。

「知ってるよ。あの夜、あなたがワタシを助けてくれたこと。良くは覚えていないけど、たぶんワタシ死んでた、あなたが来なかったら。感謝してる」

淡々と、事実だけを読みあげるように加夏子が言った。

「感謝だなんて」

殉は何と言っていいか判らなかった。

加夏子は変わってしまった。

それは判っていた事だったが、改めて目にする現実は止めどない脱力感を殉にもたらした。

「ステキな声だ。初めて聞いたよ、カナちゃんの声。やっぱり耳で聴く声はいいな、ボクは…」

「信じられない、あなたが」

会話を繋ごうとする殉の言葉を、加夏子が厳しい口調で遮った。

「あなたは隠している。ワタシをこんな目に合わせたあの男と、あなたは関係がある。それだけはハッキリ判る、覚えていなくても判る」

「カナちゃん」

「気安く呼ばないで！ …駄目なの。私の中の何かがあなたを拒むの、近寄るなって叫ぶのよ！ だからもう会いに来ないでっ！！」

「カナちゃん！」

声のする方へ歩み寄った殉は手探りで加夏子の肩を掴んだ。

その時だった。

…ウゼェんだよ…ころすぞこのクソガキ…

変貌は一瞬だった。